# 創世ホール通信No. 297

催し案内＋文化ジャーナル
2019年10月1日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100　ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207　徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91

## 東京音楽大学校友会 徳島県支部コンサート

**10月13日(日)**
**午後1時30分～(開場：午後1時)**
会場：3階　多目的ホール
入場料：1,000円
チケット取扱：黒崎楽器・音楽喫茶みき
※図書館・創世ホールでの取扱はありません。
主催▼東京音楽大学校友会徳島県支部
（問合せ先・吉永　090-4972-0554）
後援▼北島町教育委員会

©1954 TOHO CO.,LTD.

## 北島トラディショナル・ナイト23 アイリッシュ音楽の森 ～アイリッシュ音楽ユニット きゃめる コンサート～

**10月31日(木)**
**午後7時～午後9時(開場：午後6時30分)**
会場：3階　多目的ホール
出演：**きゃめる**
高梨　菖子　ホイッスル
酒井　絵美　フィドル
岡　皆実　ブズーキ
成田有佳里　バウロン、コンサーティーナ
入場料：一般　前売 2,000円
当日 2,500円
小中高生　前売 1,500円
当日 2,000円
（※未就学児童入場不可）
チケット取扱：小山助学館本店、フクタレコード
音楽喫茶みき、喫茶・アーロンズ
ジャクソンズ、エミール音楽院
北島町立図書館(☎088-698-1100)
（※図書館では電話予約も受け付けています。）
主催：北島トラディショナル・ナイト実行委員会

左から　酒井絵美、成田有佳里、高梨菖子、岡皆実　（敬称略）

■毎年ご好評いただいております北島トラディショナル・ナイト、今年は古代アイルランドの祝祭の日であるハロウィンに開催します。■今回は国内女性アイリッシュバンドの先駆者であり、結成10周年を迎えた《きゃめる》の演奏会を行います！陽気で楽しい凄腕音楽隊による、華やかなステージをお楽しみください！

## 11月3日はビデオの日 記念上映会

**11月3日(日)**
**午後2時～(開場：午後1時30分)**
会場：2階　ハイビジョンシアター　入場無料
上映作品：『ゴジラ』(昭和29年度作品)

## 映画『ぼに　迎え火』完成披露上映会

**11月9日(土)**
**午後2時～(開場：午後1時30分)**
会場：3階　多目的ホール　入場無料
上映作品：『ぼに　迎え火』(75分/監督・細川正樹)
■夏、お盆の季節を迎える徳島。母親は帰郷した娘を暖かく迎え、娘は阿波踊りの連の仲間との練習に精を出す。そして現世に戻り来る死者たちのために迎火が焚かれる頃、父親もまた、娘に会いに何処からか帰って来る…。（あらすじ）■2018年夏、阿波踊りに沸く徳島市内をはじめ、北島町や藍住町などオール徳島ロケで撮影された映画『ぼに 迎火』の上映会です。■オープニング・アクトとして、北島町在住の書道家・日野出夏穂（ひので かすい）を招いてのライブ書道パフォーマンスを行います。出演者・監督による舞台挨拶あり。

映画『ぼに　迎え火』より

# 文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

## だれが明朝体を作ったのか
### ～その誕生と歴史③

書体設計家、活字書体史研究家★小宮山博史

講演採録★2019年3月16日★北島町立図書館・創世ホール3階多目的ホール

■分合活字というのは、偏〔へん〕と旁〔つくり〕、それから冠〔かんむり〕と脚〔あし〕を別々に作って、組み合わせて一字にするというシステム。なんでそんな風にしたのかと言えば、理由は想像だけなんですけど、例えばヨーロッパで使われているラテン・アルファベットの活字を作ろうとしたら、だいたい400字から500字彫ればいいんですけども、漢字活字は少なくとも１万字は必要です。１万字彫るのは大変だというのは誰でも考えます。

■それと、ヨーロッパの東洋学者―中国語ができる人―ですね。漢字というのは単体のものもありますけれど、偏と旁、冠と脚で合成された文字だというのは理解しています。それに対して自分たちの言語、たとえば英語であれば、ＢＯＯＫならＢ・Ｏ・Ｏ・Ｋという風に考えたときに、漢字を偏旁冠脚に分けて作ろうという発想が出てくるのは当たり前だ、と。でも、見てお分かりのとおり、偏と旁、冠と脚の大きさは、３分の１と３分の２で作っている。

■「新」でいうと、左側の部分が正方形の３分の２、それから右側の部首が３分の１の幅で作り、これを組み合わせていく。すると当然こういう形の悪いものが出てくる。ただこれはものすごく効果的であったろうなと思います。後で出てきますけれども、少ない数でもって膨大な漢字を作ることができるわけです。

■ただ、これを組むためには２つを組み合わさなくてはならない。そして解版するときには、バラバラにして収納しなくてはならない。そういう手間がどうしてもかかってしまいますので、この分合活字と同じサイズで作られたちゃんとした１字の漢字活字ができたら、これは当然捨てられる運命になると思います。

■この分合活字は1837年に完成しています。フランスの東洋学者とオーストリアの学者２人がこのアイデアをフランス王立印刷所に提案したものです。この分合活字は完成後の早い時期に市販されて、国外にも売られていったようです。

■ベネチアのサン・ラッツァーロ島に建つアルメニア修道院という施設があります。僕は行ったことがないんですけど、この図版は修道院の印刷所から出版された見本帳です。その中の活字をお見せします。

■次の図版を拡大してください。作られた翌年に―かなり早い時期に―アルメニア修道院がこれを買って、自分の所で持っている活字の見本帳を出した。アルメニア修道院がどういう所に建っているのか、行ってみたいような気もするんですけど、今もあるかどうか分かりません。分合活字はここにも売られているということが分かります。活字制作業者のディドーという人が自分の印刷所から売っています。

■たとえば「火」という字が２つありますけど、同じ形ですので鋳型＝母型というのは同じものだということが分かります。これは後に日本にも入ってきます。見てお分かりのとおり、あまり形としては良くない。

■次の図版です。これは、やはりフランスでできた分合活字をアメリカのプレスビテリアン・ミッション（北米長老会）が買います。それの総数見本―すべての文字を印刷した見本帳―です。1844年に買って、これで印刷した非常に珍しい総数見本です。

■はい、次へ。ちょっと拡大してみてください。これは手偏の分合活字。こうやって、偏〔へん〕と旁〔つくり〕、冠〔かんむり〕と脚〔あし〕をバラバラにして、1300ぐらい作っておくと、組み合わせて２万３千字ぐらいできると言われています。

■後ろの頁に計算した数が出てきます。こうやって、どんどんどんどん作っていく。分合活字はシステムとしてはよく出来ていて、たくさんのものが少ない数でできるんですけど、実はこれ、デザインの上から言うとこれはダメなんですね。例えばここに手偏〔てへん〕がありますけど、この手偏は、さっき言ったように３分の１のスペースで書いてある。

■実は、旁〔つくり〕の画数によって、手偏の幅というのは微妙に変わってくるというのが、基本的な作り方なわけです。だけどそれを無視して、３分の１と３分の２で作るとなると、全体のバランスが崩れてくる。これは外国人もこの書体は良くないと言っているし、後にこれは中国に入りますけど、中国人は大嫌いだったようです。見てお分かりのとおり、偏と旁の関係がバラバラになっていて、中国人や日本人には発送しにくい作りかたです。

■これが最後の頁なんですけれども……。ここに数字の書き込みがあります。誰が持っていた本だかよく分かりませんが、多分持っていた人が数の計算をしたんだと思うんですよね。上にあるのが総数、全部の活字の数。下が補足したものだと思うんですけどねえ、変ですよねえ。計算が間違っている。上の数字が22841、下が917ですから、足し算すると23758なのに、22758とメモしてしまっている。

■こういうのを見て僕たちは「馬鹿だなあ。こいつ」と思うわけですよ。皆さんも、よっぽど気を付けないと、ちょっとしたメモが100年ぐらいたって、あいつらバカだったんだ、なんて言われる可能性もあります。気を付けましょう。これを見つけたときは凄く嬉しかったです。ザマーミロって。はい。こんな間違いしたらいかんなというものをお見せしました。

■全体を映してください。今までフランス人が作った漢字活字を見てきたんですが、これはイギリス人が作った漢字活字です。聖書の中の一文ですけど、年代から言うと1852年ぐらいだと思います。ロンドンで博覧会があったときの、広告用の見本として配布されました。ロンドンのワッツという会社が発行した１枚刷りの見本です。「イギリスだって、俺たちも（明朝体活字を）やるぞ」という意気込みで作ったんだろうと思います。

■はい、拡大してみてください。まだまだ皆さんが見て、出来が悪いなあと思われるのではないでしょうか。こういうのも誰が彫っているのか、よく分からない。中国人が版下を書いているのか、あるいはイギリスの東洋学者が版下を書いてやっているのか、よく分からないんです。そういうのが分かれば嬉しいんですけど。でも、このバランスから見ると、中国人は関わっていないような気もします。読み方と意味がちゃんと書いてあります。

■次は、この活字を使った本がイギリスで出ます。『路加〔ルカ〕傳福音書』。これは扉部分です。そして本文の頁。

■この図版は、冒頭、一番最初の所。さっきのワッツの活字を使って組んでいます。この本には２つのものが合本にされています。もう一つは『使徒行傳』。四角で囲んであるのが人名。なんでこういう漢字活字が聖書の類の中に出てくるのかというと、18世紀の末にイギリスで博愛主義運動という布教活動、世界の人たち―キリスト教を信じていない人たち―に対して布教をするという運動が起こります。その運動に励まされるように、宣教師たちは世界に飛んでいきます。

■この後出てくるロバート・モリソンもそうですし、アフリカのビクトリアの滝を発見した人―リヴィングストン―もやはり同じように布教に出て行った人です。

■僕は横浜におりますけど、あとで触れますけど、ヘボンさん―ジェームス・カーティス・ヘップバーン―という眼科医で宣教師という人なんですけど、ものすごい真面目。宣教師全員がみんな真面目で、嘘のような人たち。

■それに比べると日本の仏教の僧侶達はお酒ばかり飲んで不真面目でしたから、「なんであんなに宣教師たちは真面目なんだろうか」と大いに反省をしたようです。異国で苦労して活字を作ったり、辞書を作ったりした宣教師たちが多かったですね。

■この図版もロンドンのワッツという会社の活字を使って作っています。こんな活字です。だいぶ良くなってきた。最初のフランスの活字から比べると、バランスは格段に良くなってきました。今の明朝体の形にだんだん近くなってきていますね。

■四行目に「必」という字がありますが、これがなかなかデザインするときに難しいというか、大変な形なんですけど、普通これは楷書で書けば、こんなに正方にはならなくて、もっと平べったくなりますけど、明朝体の場合、四角い枠の中いっぱいに入れるということが必要になってきて、どうしてもこんな形になってしまう。この形は書家の先生方は大嫌いです。「こんな字はない」って。特に「心」なんて字は、全然違うっていう風に言っているようです。

■次にこの隣の「父」。皆さん、ご自宅に帰られたらパソコンか何かで、デジタル・フォントを打っていただければ分かるんですけど、これ（映像の「父」の四画目を指して）、「ひっかけ」っていうんですけど、筆を押さえ込んで払う。今の普通に出てくる文字はこのひっかけが取られている。くっついている字も別バージョンでありますけど、基本的にはこのひっかけというのはないんです。そういう風に決めちゃったみたいです。

■ちょっと投影画像を上げてみていただけますか。「之」。これもひっかけなんです。だけど「父」のひっかけは取っていますけど、「之」のひっかけは今も残している。僕はそういうのはちゃんとしていないじゃないかといつもブリブリ怒ってるんですけど。でも「之」からひっかけを外してしまうと、もうへんてこな字になってバランスがとても取れなくなる。そのためしようがないから付けてんだろうと思います。

■（「受」の字を指す）ここにもひっかけがありますね。「受」の所ね。書体デザインに接するとき、こんなところも見ていただけると、嬉しいと思います。（以下、次号に続く★採録・文責＝小西昌幸）